

解説

推進工事技士への思い

ジュウルフカル アリ チョウドウリ

(株)福田組 土木事業本部技術部
シールド・推進技術課



1. はじめに

私が社会人として歩み始めたのは15年くらい前のことです。入社して最初に配属された現場は高速道路の下部工事でした。その後、橋梁の現場や区画整理の現場などを経験し、推進工事と出会ったのは入社してから約4年後のことでした。そのきっかけは東南アジアで当社が受注した下水道工事でした。それまで推進工法のことをよく知らなかったのです。まず1週間ばかりの現場研修から推進工事に入っていました。あれから11年間、推進工事を主に様々な経験を経てここまで歩んで来ました。その中でも平成18年に推進工事技士の資格を取得したのは何よりも嬉しいことでした。

2. 私の祖国

私は“バングラデシュ”の出身です。日本に来て生活を始めてから十数年も経っています。しかし異国でいくら長く住んでいても、生まれ育ちの環境を忘れられなくいつも思い出します。ここで自分の祖国を簡単に紹介したいと思います。



写真－1 スンダルバンの風景（野生の虎）

バングラデシュはインド大陸の南東に位置する世界最大のデルタ地帯にあります。日本の約5分の2という面積で約1億5,000万人の人口を抱え、世界一人口密度の高い地域となっています。そして毎年約6.0%以上の経済成長を成し遂げています。しかし工業発展に伴うインフラ整備が進んでいないのが今後の課題の一つであるでしょう。

バングラデシュは南のベンガル湾、そして東のミャンマーとの国境を除くとほぼインドに囲まれ

ています。また国土はガンジスやブラマプトラなどの大河川を始め数多く大小の川によって網目のようになっています。特に、南西部に河川の支流が縦横に流れ、インドと接して広がるスندانバン（美しい森）というマングローブ密林は、ベンガル虎や鹿の棲息地として有名です。

3. 推進工事技士試験との出会い

今から12年前のことになりますが、当社が東南アジアのタイの首都バンコクで推進工事を受注し、そこに配属されて始めて推進工事を経験しました。タイから帰国した後も推進工事業務を引き続き担当しました。そしてある日上司から推進工事技士の資格のことを聞いて挑戦することにしました。

しかし、非漢字系国の出身である私には、簡単な挑戦ではありませんでした。第一の難関は学科試験でした。二回失敗したあとあきらめかけたころ再度上司にけしかけられ、3回目でやっと合格することが出来ました。そして実地試験は2回も挑戦しました。学科試験は四者択一ですが、漢字を読んで理解するには時間がかかりすぎました。また実地試験では書けるはずの漢字がなかなか書けない問題に直面してしまいました。そこで専門用語の漢字の勉強そして問題の回答に工夫し最終的に合格することが出来ました。

4. 業務との関係

推進工事の設計や積算などの業務もしている私ですが、推進工事技士資格試験の勉強で得た知識でより深く考えるようになり、仕事の効率も上がりました。

昨年の8月から今年4月まで業務の関係で私の出身国であるバングラデシュへ長期出張していました。この機会を利用して約1,200万人の町である首都ダッカ市役所の下水道管理局を訪問して推進工法の説明をしました。関係者の皆さんはシールド工法のことは知っていますが推進工法（Pipe



写真－2 我家

Jacking) のことは雑誌などで見た程度でした。下水道の普及率はまだ30%にも満たないうえ、交通渋滞や歩行者の多い町では推進工事の必要性をよく理解するものの工事費が高いのではないかと話が出ました。

しかし、下水道課の関係者のみなさんは Construction cost が Social cost より高いといえない現状になりつつあると感じています。

隣国インドでは現在推進工事が増えており、バングラデシュでも時間の問題です。しかし、インド同様に安い単価で推進工事を行うことがポイントになるでしょう。日本の推進工事技士の資格の保持者として自分の責任を理解し、歩行者や交通機関に障害の少ないこの素晴らしい推進工法技術を紹介したいです。これに伴い必要な材料や機器の説明もタイミングを計って行いたいと思っています。

日本国内では建設工事に伴い推進工事も減少する一方です。海外で新しい推進工事の市場を探り、当社の44人の推進工事技士の力を借りてバングラデシュで推進工事の第一歩を踏みたいものです。

5. おわりに

数十年前、日本へ留学に来日した時にはそれほど長く在住するとは考えてもいませんでした。し